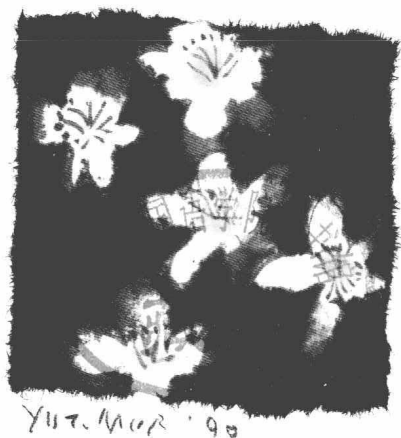


高原の聖母

澤野久雄



主婦の友社

〈検印省略〉

高原の聖母

平成二年四月十日 第一刷発行

著者／澤野久雄

発行者／石川晴彦

発行所／株式会社主婦の友社

〒101 東京都千代田区神田駿河台二の九

振替 東京二一八七五二七番

電話 編集(03)二九四一一〇八一

販売(03)二九四一一三三三

もし落し、乱し、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

印刷所／凸版印刷株式会社

高原の聖母 ● 澤野久雄

高原の聖母●目次

時雨	5
川	25
疑惑	46
盗み	67
音楽	88
どこへ?	119

火の硝子……………	149
惑いの雪……………	170
春 嵐……………	191
群衆の中の一人……………	212
懐かしい町で……………	231
「別れ」の意義……………	257
川は流れる……………	267
あとがき……………	281

装丁・装画／村上
豊

時 雨

車のフロント・ガラスに、粟粒ほどの水滴が一つ当たったと思うと、それは見る間に濃密になって行つた。前方にかかつている高速道路が、急に煙り出す。ワイパーが、扇形に動きはじめた。

「おや、やっぱり降って来たな」

落合基一は、小さく呟いた。

「はい。時雨で御座いましょうか」

運転手は正面を向いたまま、丁寧な口調で言った。

「今日は珍しく早く帰って来たというのに……僕がたまに殊勝な心がけを起したりするから、やっぱり雨になる」

「いつも、お帰りは遅いんでしょう」

「うむ」

その日、彼は会社の車で用を足して歩いた。面倒な折衝もあって、疲れた。もう一度会社へ戻ろうかと思つた

が、すでに夕方が近い。それで出先から電話で連絡をさせると、そのまま帰宅することにしたのである。

十字路で車が止つた。信号が赤になつていた。彼はふと、左手の窓を見た。横手の窓に当る雨は少ない。

——おや、ちようどあの店の前だ。

忙しげに行き来する人びとの向こうに、小さなショウ・ウインドウが見えていて、二段に吊つた棚にガラス器が二、三十点並んでいる。紅いワイン・グラス、青い大皿、黄色いカット・グラスのコップ。みな、ヨーロッパのものであろう。すでに灯のついているスタンド・ラムプは、——これは古いものではないか、——茸のような形をした絵模様のある笠の下が、真紅に燃えているようである。

以前から、一度寄つてみたいと思つている店だが、彼はその店の前を、毎日通るわけではなかった。会社へ行く時は、大抵、目黒駅で電車に乗ってしまう。帰りに車を使うことは時々あるが、そういう日はとかく時刻が遅かった。店は、夜の八時ごろには表を閉ざすようだった。たとえいくら早い時刻であっても、途中で車を降りるのはわずらわしかった。そこからまたタクシーを拾うには家が近すぎたし、そうかといって歩くには遠すぎ

る。

不意に、扉を押してその店へ入って行こうとする人の姿が、落合の目に映った。漆黒の、裾の長目なオーヴァが美しかった。いや、オーヴァをまとった女の、体の線が美しいのかもしれない。三十歳になるだろうか。しかし女は、なかば扉を押しあげたまま一度ふり返って、誰かを迎えようとしているようである。

その時、車はすべり出した。彼は漸く、正面に向き直った。行く手、目黒駅の辺りはもう店々に灯が入っている。広告燈が明るい。雨の日の夕暮れは、いつもよりずっと早かった。

*

*

「さあ伯父様。もう卓子におつきになってもいいわ」

落合が夕刊から目を上げると、姪の菊江が、卓子の上のガス台にゆきひらを置くところだった。

「おや、今日は菊江さんもお手伝いか」

「あら、伯父様は御存知ないけど、あたし毎日お手伝いしてますのよ」

三年前、大学へ入る時に上京して来て、以来、落合の家で預かっている娘である。

「君がいると、この部屋が明るいね」

「いえ、伯父様が早くお帰りになったから、伯母様だって今日は特別……。この部屋のあかりもいつもより多いし、伯母様もいそいそとしていらっしゃる」

「年寄りをひやかすもんじゃないよ」

落合は首をまわして、居間の中を見た。なるほど、平常は消してある柱のあかりも、今夜はみかん色の灯をともしている。小さなドレッサーには、スタンド・ラムプが。そして食卓の上には、大きな笠をかぶった電燈が、白のテーブル掛けを照らしている。

しかし落合には、菊江という娘を預かるようになったことが、やはり幸運だったと思われる。長男の駿がふらりとアメリカへ渡ってしまい、次男の捷が事故に遭って死んでしまうと、家の中は急にひっそりしてしまつた。一人残った娘の彩子が思いがけなく早い結婚をして出て行くと、この家は言葉通り、雛の巣立つて行ったあとの野鳥の巣に似て、もういいものに見えるようになった。

彼は自分の家の庭で、五葉松の枝にかけられたひよどりの巣を見たことがある。

高さ三メートルほどの松の下枝に、ある日、二羽の小

鳥が小枝や藁しべを運んで来ていると思うと、三日ほどで巢は完成したようだった。母鳥がその中に何日か坐りこんでいると、もう卵が孵った。更に何日か経つと、三羽の幼鳥が巣立った。すると鳥たちは二度と巢に戻って来なかった。やがて雨が降ると、ひよどりの巢は音もなく崩れ落ちてしまった。彼はふとはかないものを感じたが、子供たちが次々と家を離れて行ったあとは、数日の間、崩れ落ちて行く野鳥の巢を思い出していたものだ。

菊江の登場はやはり、五十代なかばをすぎた男にとって、生活の彩りになっているだろうか。いや、彼自身はまだ、慰めの要る年齢とは思わない。しかし妻の布佐には話し相手が出来たというだけでも、日日の慰めになっているにちがいない。

春慶塗りの丸盆に銚子をのせて、布佐が台所から姿を現わした。

「お待ちどおさま。少し寒くなりましたから、今夜は鍋ものにしました」

落合が長椅子から食卓に移ると、ゆきひらの中ではもう煮汁がふき上っている。

「珍しく早くお帰りになるという電話で、伯母様もあわ

てなすったわね」

薄いかごに盛った野菜を、菊江は順々に鍋へ運びながら、

「でも、今日はとてもいい日だから……」

布佐は落合のぐい呑に酒を注いでいたが、あわてて左手の人差し指を口の前に立てた。

「おや、そんないいことがあったのか……」

「だって、第一にあなたのお帰りが早かったこと。三人揃ったお夕飯なんて、滅多にないことですもの」

「そして、第二は……？」

「それはあとから……」

落合は一度、静かに酒を口に運ぶと、小皿のいかの塩辛に箸をのばす。

「あなた、向こうで少し火にかけて来ましたから、もう大体煮えていますわ。お魚は今日鯛ですわ」

「なるほど、よほどいいことがあったらしいな」

大皿には、鯛の薄切りと、海老とはまぐり。かごには白い葱と、もやしと緑の春菊。

伯母様、おっしゃいよ。言ってしまいませんか。のどまで出かかっているでしょう。二人の明るいやりとりであとで、

「ねえ。駿が今日、あたしにお金を送って来たんです」

「なに……？」

「あたしのお誕生日に、あなたと食事でもしてくれって……」

「あいつが！」

思いがけないことであつた。

なるほど、妻が浮き立つような気持になるのは、無理もないことかもしれない。なにしろ日本を出て行ってからしばらくは、梨のつぶて。帰って来たと思うと新しくヴィザをとって、またすいっといなくなってしまう。一体、何をやって暮しているかもよく分らない息子である。偶然にニューヨークで出会った人が、ホテルで働いていたと言うかと思うと、次の人はレストランで見かけたという。大げさに言えば、変転きわまりない。まあ、若者が野望に燃えてといえば聞こえはいいが、

「君の息子、ニューヨークで何をやっているんだ」

知人にそう訊ねられたりすると、彼は自分の胸が不意に波立つことを意識せずにはいられない。そういう息子が、母親に金を送って来たという。

「あなたのお誕生日には、あなたにお金を送るって……」

「いや、それは遠慮するよ」

と彼は言った。

「まだ、子供に小遣いをもらうほど、俺は落ちぶれちゃいないよ」

「まあ、そんなひどい言い方……」

鍋の野菜を、自分の小鉢に移そうとしていた布佐の箸が、宙で止まった。

「ひどいわ。あの子だって今まで勝手なことをして来ているから、これからは家のことも少しは考えようとしてくれるでしょうに……」

「あの子が家のことをね」

「親として、一応、喜んでやってもいいことじゃありません？ ささやかな親孝行……」

——親孝行か。

このごろ余り耳にしない言葉だな、と胸の中で呟いた時、彼は自分の頬に一種皮肉な微笑が浮かんで来ようとしているのに気づいて、あわててそれを押し殺した。妻がそれに気づけば、また彼女の気持を傷つけることになると思ったからである。

「しかしね。そんなことで、余り子供に期待しちゃいけないぜ。親は子に与えた、だからそれだけのものが戻っ

て来るだろうと考えることは、現代では僭越な思想だよ。そりゃ、ボールを壁へ投げつける。強く投げつけば、強いボールが返って来る。そっと投げれば、少しきり戻って来ない。それは物理的な真理なんだ。しかし人間の場合はちがうんだ」

「どうちがいます？」

「親が子に与える。つまり、親が子を可愛がるということとは、可愛がつたその時、すでに親は子供から喜びを与えられているんだと思わなければならない。猫可愛がりという言葉があるだろう？ あれなんか、可愛がることで、もうはつきりと親は喜ばしてもらっているんだ。それを忘れて、あとあとまで子供に何かを期待したら、子供に借金を背負わせて、やがてその返済を要求するということにならないか」

「……」

「少し話がうるさくなったかな？ まあ、君も一杯飲まないか？」

「お盃、お持ちしましょうか？」

と、菊江が横から口をはさんだ。

「うん。君の盃も持って来なさい。このごろの女子学生は、随分酒が強いんだから……」

菊江は笑って、椅子を立った。陰悪とまでは言えないとしても、ひどいわ、と言った時の布佐の声は高かった。傍で聞いていて、菊江も心をいためたであろうか。

「あら、また降って来ましたわ」

菊江の声が、キッチンから流れて来た。

「いや、僕が帰って来る時に降り出したんだよ」

「それが一度、やんだんです。そしてまた……」

落合は窓を見た。もうすっかり暮れ切っている出窓のガラスを、雨が洗いはじめている。すじをひいて落ちる雨が燈火を受けて光っていると思うと、彼の目にはふと、さっき車の中から見たガラス工芸の店の、花やぐシヨウ・ウインドウが蘇って来た。

「そういえば、今日はおかしな日でしたわ」

「何が……？」

「駿はお金を送って来るし、捷のことを訊ねて来る電話があつたし……」

「捷のことを……？」

「ええ、捷の七回忌の法要をやるのか、と言って。それが若い女の人だったんです」

*

*

「誰だ、それは……」

菊江が、盃を盆にのせて運んで来た。

「さあ。久しぶりだから僕が注いであげよう」

彼は二人の盃に、順々に酒を注ぎ、最後に自分の空いている盃に酒を満たした。

「お鍋のもの、あがつて……」

「うむ」

「電話して来た方、あたしの知らない人でしたわ。片貝さんとおっしゃるの。あなた御存知でしょう？」

「片貝なんて人、知らないな」

「忘れていらっしゃるのよ。北海道で、六年前にお目にかかった、と……。声のとてもきれいな方」

その日、捷が交通事故に遭ったという知らせを受けて、落合はあわただしく羽田を発った。千歳から札幌へ急がせた車の窓から、霜枯れた樹林の彼方に恵庭岳を見た。その頂を覆っていた雪の、なんと鋭い白さだったことか。山の麓に静まっているはずの支笏湖には、もう訪れる人もあるまい。深く、透明度の高い湖には、冬の沈黙が積み重なって来ているのであろうか。

——捷は……捷は口がきけるのだろうか。

しかし、訪ねて行った市内の救急病院で、捷はすでに

霊安室の寝台に横たわっていた。

学校を出て大手のカメラ会社に入った捷は、将来、レンズの研究と開発をすることになっていた。しかし、一応は業界のことも知っておかなければならない。そういう含みのある札幌支社への赴任だった。多分、一年か二年たてば東京の本社に戻るようになるだろう、——捷自身、そう言っていたものだ。

捷が東京を立つ時、妻の布佐は、

「あの子も、遠い所へ行ってしまうのね」

と言った。長男が太平洋を越えて行ってしまったから、弟の捷には東京にいてほしかったのであろう。

「ああ、札幌も海を渡って行くわけだが、でもアメリカとはちがうよ。東京からでも一時間半だ」

落合は笑って言った。

「それに、研究室へ入ってしまったえば、なかなか東京を離れる機会もあるまい。男の子は、少し世間を見ておく方がいいんだ」

彼はそう言っ妻をなだめたものだが、捷の札幌生活は僅か七か月ほどより続かなかったわけだ。

落合は警察署の交通課を訪ね、捷の住んでいたアパートの始末をし、火葬場の冷たい風を味わい、三日後には

息子の骨を抱いて帰京したが、病院へは何人かの先輩、同僚が訪ねて来てくれた。その中には、何人かの女子社員もまじっていた。

落合に会うと、彼らは、一様に鄭重な悔みの言葉をのべてくれた。霊安室では香をたいて、それぞれに黙禱を捧げてくれた。が、一人だけ落合に対しても、満足に挨拶の出来ない娘がいた。

彼女は霊安室に入ってきたと、まっすぐに捷の遺体に近づいた。そこに父親のいることなど、目にも入らないようである。娘を案内して来た看護婦が、捷の顔を覆った白布をのけると、二、三秒、身じろぎもせずに捷の顔を見つめる。と、突然、ひざまずいて、捷の顔に自分の顔を伏せた。

看護婦が驚いて彼女を抱き起すと、
「亡くなった方を、涙でぬらしてはいけません」
急いで彼女を寝台から離れた。

その時の娘の号泣する声は、固いコンクリートの壁をやり動かすかと思われた。

「なんで……」

という叫び声が、彼女の口を出た唯一の言葉だった
が、彼女は捷に向かつて、

「なんで死んでしまったのか」
と言いたかったのであろうか。あるいは看護婦に対し
て、

「なぜ、そこで泣き伏してはいけないのか」
と、抗議しなかったのであらうか。

看護婦は娘をやさしくなだめながら、霊安室から連れ出した。

落合は衝動的にそのあとを追って出ようとしたが、また次の客が入ってきた。彼は捷の大先輩に当るその客に、丁寧に弔問の礼を言い、会社に迷惑をかけたことを詫びた。相手はしばらく低い声で話をし、やがて霊安室を出ようとした。落合もその客を見送りながら扉を出たが、泣き崩れて落合に挨拶も出来なかった娘の姿は、もう廊下には見えなかった。しかし、その娘が片貝雪という名前だったことは、続いて訪ねて来た捷の同僚の女の子に教えられた。

彼は帰京して、一応のことは妻に話した。息子の運転する車が、大型のトラックと接触したこと。そのはずみに息子の車はね飛ばされ、横転した。頭を強く打ったことが、致命傷だった。だから顔も体も不思議なほどきれいだったと。説明が事故の輪郭を報告するだけだった

のは、説明がくわしくなればなるほど、妻の悲しみは痛みを増すだろうと思つたからである。

やや落ちついてから、彼は札幌で弔問に来てくれた人に、それぞれ礼状を書いた。その中の何通かには、返事が来た。しかし、片貝雪からはなんの挨拶もなかった。何か月か、彼はその娘のとり乱した姿を思い起したものが、年と共にそれも忘れていた。

「片貝さんという人、どこから電話を……？ 東京からだった？」

「あたし、聞かなかつた。突然で、吃驚してしまつたから。で、法事は日を改めてお墓のある新潟ですが、祥月命日には東京のお寺で、家族だけ揃つてお経を読んでもらうと、それだけお伝えしましたわ」

「片貝さんて、幾つぐらいの人だった？」

「それは分かりませんわ。会つたわけではないんですもの」

「ああ、そりゃそうだな」

「でも、声は若かつた……。あなた、どんな人だったか思い出せませんか？」

「うん、無理だね。こちらは息子に死なれて氣持に余裕はなかつたし、それ以後、あの支社の人には誰一人とし

て会つてはいないし……」

「……」

「その人に、世田谷のお寺は教えたの？」

「ええ、大体の場所と名前は……」

「もしその日、寺へ来てくれて顔を合わせれば、あそこの人かと僕も思い出すかもしれない」

「でも、今ごろになつてまたお詣りをして下さるなんて、もしそんなことがあれば……」

ただごとではない、と、妻は言いたいのであろうか。

捷の亡くなつた日から、すでに六年の歳月が経とうとしていたのである。捷が在籍した会社の中の誰が、それと氣づくであろうか。入社して一年に滿たず死んでしまつた青年のことなど、今では噂する人があるとも思えない。あれば、布佐の考える通り、「ただごと」ではないかもしれない。

「まあその女の人、たまたま東京へ出て来て、不意に捷のことを思い出したのかもしれない」

法事のことなど、その女性と布佐と、果たしてどちらが先に口にしたのか。

「おい、そんな話ばかりしていないで、もう少し飲めよ」

彼は箸をのばして鍋の中の野菜をとった。それから底の方に沈んでいるはずの、鶏肉か魚をとるつもりだった。が、彼の箸の先にひきあげられたものは、煮えすぎた貝からはがれ落ちた蛤であった。

「ほら、蛤は煮えすぎて固くなってしまったじゃないか。大体、菊江さんが今日はいいい日だなんて言って置きながら、捷のことなど思い出させるから……」

「だって伯父様。伯父様はいつか、捷も一度ぐらい満足な恋愛をしたことがあるだろうかっておっしゃったわ」「しかし君、その片貝という女性が恋人だと思うなんて、そりゃ、少し飛躍しすぎるよ」

「でも、そうかもしれないと思った方が、楽しいんじゃないありません？」

「もし今度顔が合って、途端に僕ががっかりするような人だったら？」

菊江は箸を持ったまま、小さく肩をすくめて見せた。

——捷に、恋人がいたかどうか。

何かの話のついでに、彼もそんなことを菊江に向かって言ったことは、たしかにあったかもしれない。しかし、彼がそんな言いまわしで失われた息子を惜しんだとすれば、それは相手が若い菊江だったからであろう。

捷が死んで半年か一年たったころのことだが、——気心の知れた古い友達と酒を飲んでいて、話題が相手の息子のことから、捷の上まで落ちて来たことがある。

「俺はこのごろひよいと考えるのだが、俺の息子は果して女つてものを知っていたのかなあ」

「おい、おい。女子高校生だって妊娠する時代なんだから」

「そりゃ、ソーブランドとかなんとか、まあ俺たちには全く無縁な女たちの生態さえ、しばしば耳に入ってくる時代だ。捷に親しい女子学生の何人かがいたことも知っている。しかし、あいつが本当に女を愛したことがあったかどうか」

「そうか。性の問題と愛情の問題か」

「ああ。こんな時代に、自分の息子だけが無困状態に置かれていなんて、そんな馬鹿なこと俺だって考えないよ。しかし単に女の体を知っているということと、その女を愛したということとは当然ちがうだろう」

「うむ」

「こういうことを考えるのは男の……男というものの持つエゴイズムかな？」

「君の息子に、結婚の話なんかなかったのか」

「少なくとも、俺の知っている限りは……。何しろ、学校を出てその年に死んじゃったのだから」

落合がそんなことを考えたのは、捷の死後、一年間か二年間のことであった。しかし、夫婦の間で死んだ息子のことが話題にならなくなる、——いや、話題になることが少なくなるということには、互いに相手の心情を思いやって、触れずにいるということもあるかもしれない。

ところが、一応静まっていたはずの水に、不意に石塊が投げこまれたのである。いままではあるとも気づかなかった沼の畔の高い木から、紅い実が一つ、水の面に散り落ちたというべきであろうか。

その実が生み出した波紋は、一体どこまで拡がってゆくことであろうか。

「音楽はいかが？」

菊江が立つて行って、ステレオのスイッチを入れた。静かに流れ出したのは、モーツアルトの小曲だった。彼はそのヴァイオリンのひびきを耳にしながら、なぜか光輝くオーストリアの硝子を思い出した。社用でヨーロッパを旅行していた途中、ザルツブルグでモーツアルトの生家を訪ねたことがある。その町から一時間ほど離れた

所では、予定にはなかった「ガラスの村」を見て歩いた。戸数僅かに百戸ほどの村だったが、住民の七割強が、ガラス器の製造と、それに関連する仕事で生活を支えているという村である。

*

*

その夜、落合の眠りは浅かった。

夜半にふと目ざめると、隣りの床に姿勢よく寝ている妻も、大きな目をみひらいてじっと天井を見つめていた。

——おや、布佐も眠れないでいるな。

しかし彼は、妻に声をかけようとはしなかった。妻は、息子の死後六年たつてはじめて電話をかけて来たという、若い女のことを考えているのだろうか。それとも、その女の声で掘り返された、捷の記憶の中をさまよっているのだろうか。

何れにせよ、夜半に死んだ息子のことなど口にしようものなら、話はいつまで続くか分らない。どちらとも一層、目が冴えてしまう。眠り足りないのと、落合には翌日の疲労が濃くなるのである。

——昔は、そんなことはなかった。